

## 「アジアの子」試論

——時代に迫られた留学生たち——

林 麗 婷

### 一、はじめに

佐藤春夫の「アジアの子」は盧溝橋事件が勃発した直後、中国知識人郭沫若がひそかに日本を脱出した経緯を描いた「シナリオ用小説」である。「日本評論」一九三八年三月号に掲載した際、日本文壇には反応がなかったが、登場人物鄭のモデルと思われる郁達夫は二ヶ月後、中国の雑誌「抗戦文芸」第一巻第四期に「日本の娼婦与文士」（「日本の娼婦と文士」という文章を書いて佐藤を激しく糾弾した。それにもかかわらず、佐藤は一九四一年にタイトルを「風雲」と改題して、これを収めた同題の短編小説集『風雲』<sup>①</sup>を出した。従来の研究では、佐藤と郁達夫の関係や、佐藤の戦争協力が注目を集めたが、本稿では、郭沫若の日本脱出に対する日本知識人の反応を確認しながら、盧溝橋事件によるかつての中国人留学生の帰国を

どういう風に理解された／されようとしたのかを明らかにしたい。そして、留学生が寄せられていた期待と現実との齟齬について検討することとする。

### 二、日本を去る中国人

1、郭沫若の日本脱出及び日本文壇の反応  
郭沫若と日本とのつながりは深いといえよう。一九一四年に日本へ来て、十年間の留学生生活を経て、九州帝国大学医学部を卒業した。その間、意欲的に文学創作に携わって、郁達夫、成仿吾、張資平らと「創造社」を結成した。一九二三年、郭は妻子を連れて中国へ帰って、国民党に参加して、北伐軍の総政治部副主任に至った。しかし、一九二七年上海クーデター<sup>③</sup>が起った後、彼は蒋介石と対立し、逮捕令に追われ、一九二八年二月に日本に亡命した。ところが、一

九三七年盧溝橋事件が勃発した直後の七月二五日には、妻子を残して中国へ帰って抗日救国活動に身を投じた。<sup>④</sup>

ところが、郭の行動はあくまで個人的ものであったにもかかわらず、日本では波紋を呼んだ。一九三七年八月二五日の「東京朝日新聞」に、「支那左翼派の暗躍」という題の記事が見られる。

上海戦争発展に伴ひ北支事変に際して上海で結成された抗敵後援会は救国会幹部及び郭沫若等の参加により、実行機関として二十三日戦時計画委員会を組織し抗日聯合戦線の主力はこれ等人民戦線派の手に移りつつあり、左翼的分子の活躍して行く傾向は注目すべきものがある。

また、郭沫若は帰国の経緯を「由日本回来了」という文章に書いて、「宇宙風」第四七期に載せたが、山上正義が「日本を去る」という題で翻訳し、「改造」(一九三七年一月「上海戦勝記念臨時増刊号」)に掲載した。要するに、郭沫若の日本脱出は注目されていたことが窺えよう。なお、佐藤の「アジアの子」の前半はほぼ「日本を去る」に基づいて書き直したものとみられる。<sup>⑤</sup>

同じ「改造」一九三七年一月月号に、井上芳郎は「脱出せる郭沫若を裁く―その思想批判―」という題で、郭の行動を「猛烈なる抗日宣伝の急射撃を食はせて我等を呆然たらしめた」と述べ、「今回蒋介石の下に飛んで行つた郭沫若は、自ら過去の左翼陣営の雄たり

と信ぜられた時代の主張を捨てたもの」と断じた。波多野乾一は「郭沫若・ヌーラン・陳独秀」(「中央公論」一九三七年一〇月特大号)の中で、「邦人に馴染の多い名前だけに、関心も相当深かろう。多年その生命の安固を、日本の保護に託してゐた彼が、抗日前線の真ツただ中に飛び込んで、アチはもとより『抗敵救亡後援会』の副主任として、正主任沈鈞儒を輔け、事実上戦線の中心人物にならうとは！ かうしなければ、彼の立つ瀬がなかつたのでもあらうが、忘恩の譏りを免れないやうだ」と批判している。つまり、二人の立場はそれぞれ違うと思われるが、郭の帰国に対しては批判的な姿勢だった。ただし、郭は井上の述べたように「安らかに我国で暮らしてゐた」のではないし、また単純に波多野の述べたように「日本の保護に託してゐた」わけではない。実のところ、郭は日本に滞在していた間、長年当局の監視下に置かれた。例えば、郭は「日本を去る」に「事変が勃発して以来、憲兵、刑事、制服警官が始終監視にやつて来て、くだらないおしやべりをして行く」と記している。<sup>⑥</sup>

後藤和夫は「抗日支那のインテリは何を考へてゐるか?」(「中央公論」一九三七年一〇月、第五二号「臨時大衆版」)の中で、「先日まで日本に逃れていた郭沫若が、いまは抗日論の先頭に立つてゐる。彼は南京政府に容れられなくて日本へ逃れ、日本で生活してゐたのである。そして、日本の実相を知るものとして事変の始まる直前に、

かねて彼の仇敵である南京政府に迎へられて帰国した」と述べた。「事変の始まる直前に帰国した」という点は誤りだったが、「日本の実相を知るものとして」はある程度正しい見方であろう。

実藤恵秀は「抗日思想戦線の強化―郭沫若・沈鈞儒・其の他」〔東大陸〕一九三七年二月一〇日、第一五卷第一〇号)の中で、郭の帰国は「彼の来歴を識る程の者には、大小さまざまの衝動を興したに違ひない」といい、満洲事変や上海事変にも帰ろうとしなかったのに、「今次の事変が起こるや、未だ戦火が上海にまで拡大しない七月末に、彼はもう故国の土を踏んでゐた。今次の事変の「嚴重性」を雄弁に物語るものである」と指摘した。また、実藤は「わが忠勇無比の皇軍の威力の前には結局中国軍隊は敗北する外はない」と述べたが、「全中国知識階級をリードしてゐる抗日的傾向は、容易に消滅されないだらうことを深く心配するのは筆者だけではあるまい」、「わが国では、今後永久に中国全体を絶対的にわが支配下に置くことが出来ればともかく、さもなくばこの思想陣を撃滅するには我からの理論的闘争による以外は困難ではないか」という。要するに、実藤は郭の行為が事態の重大性を物語っていると見なし、また郭を代表とした中国知識階級の抗日的傾向は容易に撃滅され得ないと指摘した。

一方、大宅壮一は郭を「現在の抗日陣営の中でもつともよく日本

及び日本人を理解してゐる人である」と見て、「日支の間は、今のやうな状態が永遠につづくものとは考へられない。いつか両国民が政治的、経済的にのみならず、文化的にも、公然と、そして以前よりも密接に手を握り合ふ日が必ずくるにちがひがない」と述べ、郭を将来日支の文化的にむすびつくくさびになることを期待している。〔香港の一と月―郭沫若と会はざるの記〕「文藝」一九三八年二月一日、第六卷第二号)

ところで、郭沫若自身はどのように考えていたのであるうか。郭は「支那人の見た日本日本人の支那人に対する態度」〔日本評論〕一九三七年九月、第一二卷第九号)の中で、日本人は中国人の「侮日抗日」行動が留学生に源を發していることを以て、「甚だ不可解としてゐる」が、その理由を日本の教育に帰すべきだと述べている。というのは、「日本の国民教育の大体は忠君愛国であるが、斯くの如き教育法の下に薰陶せられた支那の留学生達は、いよいよ国に帰つて見ても忠を尽くすべき君は無い。さりながら、愛すべき国は尚存在してゐる」からである。また、「日本の教育家、為政者、乃至は一般に疑念を抱いてゐる人々は、皆これを以て慶賀して然るべきであらう」と皮肉つてもいる。

実藤恵秀も「わたしは、かねて中国の日本留学の功罪を論じて、留学生が日本から愛国心をまなびとつてかえつたことは、中国にと

って、もっとも大きな収穫だった」と思うと述べた。留学生という立場はある程度両国の文化的交通を担いながら、精神的葛藤を抱えるものであるということがわかるであろう。

また、郭は「日本を去る」の中で、「自国の同胞が滅亡の危機に臨んでゐる時、誰が自分の一身一家の安全を安閑として顧みて居られようか？これを死地に処して而してのち生き、これを亡地に置いて而してのち存す<sup>マダ</sup>だ。僕にとつては唯一の残されたる生きる途であることを信ずるものだ」と書いた。すなわち、郭にとつて、中国に帰って救国活動に身を投じることは余儀なくされた道である。

また、この時期に帰った中国人は郭沫若一人のみではなかったに違いない。例えば、室伏高信は「中国の国民に寄す」という文章を「日本評論」（一九三七年九月、第二二卷第九号、臨時増刊「抗日支那の解剖」）に載せた。

〇〇〇さん

あなたのお手紙を拝見しました。あなたもいよいよ日本を去られますか。一人去り、二人去り、この十日ばかりのうちに私の知つてゐるだけでも、七八人の貴国人がこの国を離れてゆきます。あなたのやうに長くこの国にふみとどまり、そして恐らくは半永久的にこの国にふみとどまらうとなさつてゐた方までが、遂に帰国の決心をなされたのです。あなたの胸中を察して

万感交、至るものは私一人ではないと思ひます。

書簡体の作品だが、タイトルは中国の国民宛になつてゐる。盧溝橋事件後に中国人が続々国へ帰つた現象を目にして書いた作品だと考えることができる。

以上をまとめると、郭沫若の日本脱出は日本文壇を驚かせながら、「忘恩」などの批判を浴びたが、ここには、日本知識人と郭沫若との認識のずれが露呈している。郭沫若は大宅に「よく日本及び日本人を理解してゐる」人物として、将来日支友好の楔になることが期待されてゐる。しかし、郭沫若の言動から見てもわかるように、日本の対中侵略が進む中、日本への中国人留学生の「親日」はやはり難しかったものと思われる。

## 2、満洲事変後の中国人留学生

日清戦争後、中国人の日本への頻繁な留学が始まつた。実藤惠秀は盧溝橋事件までの留学史をいくつかの段階に分けた。すなわち、初期の日本留学（一八九六年より一九〇〇年まで）、上潮期の日本留学（一九〇一年より一九〇五年まで）、革命前の日本留学（一九〇六年より一九一一年まで）、民国初年の日本留学（一九一二年より一九二二年まで）、文化事業部成立以後の日本留学（一九二三年より一九三二年まで）、満洲事変以後の日本留学（一九三二年より

一九三七年まで)の六区分である。<sup>⑧</sup>

これは歴史の切れ目に沿う区切り方だと思われるが、全体的に中国人の日本への留学が活発かつ継続的に行われていたことは事実であろう。これらの留学生のうち、文学者、革命者、教育家など様々な領域で歴史に影響を与えた人物が含まれていた。例えば、魯迅、周恩来、郭沫若、郁達夫、蘇菲青らがそうである。また、留学史を振り返って、留学生の一斉帰国も繰り返されていた。例えば、一九〇五年の「清国留学生取締規則」への反対、一九一四年の「対華二カ要求」への抗議、一九二三年の関東大震災や一九三一年に起きた満洲事変による帰国などである。留学生たちは否応なしに近代中日や世界情勢に影響されるものといえよう。

ところで、満洲事変後の留学生はどうなったのだろうか。実藤によれば、「昭和九年にも増加の一路を辿り、九、十、の二ヶ月のみで新渡日者七八百を超へたが、昭和十年の秋季には、恐ろしいほどの勢で留学生が殺到し、新渡来者のみにても三千と推せられ、日本人のみならず、中国人をも驚かした」と留学生の大激増ぶりを見せたという。また、その原因には、中国人の日本研究熱の勃興と、為替相場の中国人にとっての好転が挙げられるという。<sup>⑨</sup>

では、盧溝橋事件まで日本にいる中国人留学生はどれくらいだったか。河路由佳が作成した表<sup>⑩</sup>によれば、実藤が言ったように、満洲

事変後、留学生の数は一旦減ったが、一九三四年に再び増加し、盧溝橋事件直前の一九三七年六月に、中華民国と「満洲国」の留学生数はピークの五九三四名に達したという。

この数千人の留学生は日本でのような活動をしていたのだろうか。小谷一郎は「一九三〇年代中国人日本留学生文学・芸術活動史」(汲古書院、二〇一〇年一月)・「一九三〇年代後期中国人日本留学生文学・芸術史」(汲古書院、二〇一一年二月)の中で、この時期の留学生の活動を紹介している。例えば、社会科学研究会を成立し、「孫中山逝去記念会」や「パリコンミュン記念会」を開催したり、中華留日反帝同盟や東京左連(中国左翼作家連盟東京支部)などを結成したりした。一方、盛んに雑誌を作って日本文化を中国へ紹介した。また、郭沫若は何らかの形で留学生の活動に関わりを持っていたことがわかる。例えば、留学生が出している雑誌「東流」<sup>⑪</sup>、「詩歌」<sup>⑫</sup>、「劇場芸術」<sup>⑬</sup>に寄稿したことがある。しかも、「文海」<sup>⑭</sup>のタイトルは郭が名付けたという。

留学生の活動にはどんな特徴があったのだろうか。実藤はこの時期の留学生活動は「これが文化運動、これが抗日運動と、判然と分ち難いのが一大特色である」と述べた上で、一九三六年に結成された中華留日学生連合会の「学連半月刊発刊詞」を紹介した。その中で、まず「われわれの祖国はいまや空前未曾有の危機に遭遇してゐ

る」と指摘して、日本を「逃避の場所」と考えてはならないと述べ、「祖国に対する責任をつくさなければならぬ」と記している。そこで、「我々」にできることは「日本社会の各方面を研究し、日本文化を国内に紹介」すること。それにより「各国の社会機構を了解、自己に進むべき道を決定する」ことができるという。要するに、留学生は抗日活動と日本文化の紹介を自らの責任としていて、一見矛盾するような立場だが、留学生の複雑な気持ちを表しているといえよう。

また、大久保弘一は「赤色支那」（高山書院、一九三八年）の中で、留学生に関してのいくつかの事件を記述している。例えば、「執拗な中国共産党の手先に躍る留日支那学生の左翼抗日運動も、打続く弾圧と水も洩らさぬ厳重な監視下に根絶したかに見へたが、彼等のうち強烈な左翼反日思想を抱持する小数の者はなほ蠢動を止めず、本国の抗日侮日政策を反映して左翼から抗日へと闘争の局面を展開した。即ち帝都で、堂々と週刊新聞を発行して、にくむべき抗日思想の宣伝に狂奔してゐた「留東新聞」事件が起こつた」と述べた。

一方、実藤は「新支那の誕生と日支文化関係」（東大陸）一九三八年二月一日（第一六卷第二号）の中で、「彼等の好む所に従つて、彼等の勝手にやつてゐたのが、最近までの状態であつた。静かにこ

れをながめると、いままで四十余年、日本文化の支那への輸入は、彼等の積極的によつたもので、日本は寧ろ消極的であつた」と留学生の日本書翻訳を評価している。

### 3、盧溝橋事件後の中国人留学生

ところで、盧溝橋事件が勃発して、留学生たちはどうなったのだろうか。一九三七年八月一〇日の「読売新聞」に、「三千余の支那留学生 帝都から姿を消す」という記事がある。

本月に入つてからは支那への便船の度ごとに帰国する者が増加し、四千人在京留學生中現在までに三千四百人は帰国し僅に六百人位が残つているだけ、その他の一般支那人三千五百人中百数十名は帰国し今後ますます増加の傾向となつて来た。

また、「日華字報」（一九三七年一月三〇日 第六四号）を確認すると、同年六月現在、「在籍留學生は中華民國四〇一一、滿洲一九三四計五九四五であるが復籍を除きたる実数は中三五五九滿一八七一計約五五三〇である」が、盧溝橋事件の影響で、「支那留學生の帰国する者相踵ぎ、十一月一日現在では中華留學生の日本残留者は僅かに四百名となり事変前の約十分一に激減した」と記している。さて、留學生は帰国して後、どのように暮らしていたのか。田辺耕一郎は「支那留學生の話（改造）一九三七年一月、第一九卷

第一三号「上海戦勝記念臨時号」で、関心を持って事変後周りの留学生を観察しながら、帰国した留学生は日本軍と戦っているそうだと記している。それは帰国して「漢奸」の疑いをかけられたくないのと、「日本から摂取しかへつた知識をもつて日本に嘔みついてくる」という二つの可能性があると推測している。また、「なまぬるい同情とか、去勢されたやうな親日感情などといふものより、戦つて到達したしんの高い自覚と成長でなくては、日支のこれからの友情は期待できないといふことを、いまの時局は教へてゐるやうである」と指摘した。田辺の現時点を超えて将来の友情を目指すコミューン間のシンパシーが読み取れるだろう。また、留学生の内面に抱えた複雑な一面を指摘したかと思われる。

「日華学報」で帰国した留学生の動きについて、中国現地の新聞紙の記事を訳載している。例えば、同じ「日華学報」第六四号で、中国の新聞紙「大衆日報」一九三七年九月二八日の記事「雲南留日学生帰国服務」というのが見られる。「留日雲南学生の戦時帰演服務団員は近日続々帰来し一切の抗戦工作に参加尽力し如何なる犠牲も惜しまず最後の勝利を争取せんとしている」という。

同じような記事としては、「中央新聞」一九三七年一〇月六日の「留日帰国学生民間宣伝に努力」がある。その中には、「京郊宣伝団」を組織して各地で活動をしている留学生たちの様子が描かれ、

「至る處群衆は各種講演を静聴し、団員と村民との簡別談話をなして日本の内在的矛盾及びその社会状況を解説しつつかるところこれは頗る歓迎されてゐる」と記されている。

要するに、複雑な気持ちを抱えているにせよ、多くの留学生たちは、帰国して抗日活動に参加していた。さらにいうならば、留学生は日本の事情について中国より詳しいので、そのことが効を奏したことも事実であろう。

以上からわかるように、満洲事変以後も、従来の役目と同様、留学生は日本文化を祖国へ紹介していた。一方、日本の対中侵略が進むに伴い、左翼抗日活動は活発になった。そして、盧溝橋事件後、大勢の留学生が日本を引き揚げて、中国で抗日活動を展開した。郭沫若の帰国や抗日活動への参加は、このような情況下では、仕方のないものであつたことも考えられる。彼がことさらに日本文壇に衝動を与えたのは、従来彼が「親日派」の代表的な存在と見られていたためであろう。

### 三、「留学生」、「アジアの子」

#### 1、佐藤春夫と「アジアの子」

ところで、「アジアの子」はどのように郭沫若や留学生たちを描いたのだろうか。

汪ははじめ眉つばものと思ひ込んでゐた皇軍の北支開発の真意を徐るに会得しはじめた。彼の愛妻を通じての日本人一般の氣質に対する理解に基いてである。ロシアの近状が永年のロシア的共産主義の夢からさめさせた折から、汪はイデオロギーによつて民を救はうとする小兒的インテリ性を脱却して、民を幸福にするものはイデオロギーの如何ではない。事実のみと悟つた。近来の苦境がこの詩人に現実の洗礼を与へたからである。イデオロギーは何でもいい、真実に於て民を晏如たらしめざるべからざる所以に氣づいて今は日本的イデオロギーによる北支の開発に乗り出す決意が出来たのである。

これは汪の「転向」についての説明である。まず、汪はロシアの近年の状況を見てイデオロギーで民を幸福にすることはできないと悟つたという。しかし、「日本的イデオロギー」は認める。ここでは明らかに「イデオロギーは何でもいい」という考えと矛盾している。そして、汪の「日本的イデオロギー」についての認識は「愛妻を通じての日本人一般の氣質に対する理解に基づいている」とされている。愛妻↓日本人↓日本という構図には個人を全体／国家に回収する考え方が見られる。また、「皇軍の北支開発の真意」、「真実」は曖昧のままである。これは「アジアの子」はもともと「シナリオ小説」のため、映画の表現問題にも関わることであるが、逆に言

葉で説明する「義務」がなくなり、日本軍が中国を侵略している事実を描くことを回避したのではないだろうか。

次に、本文のなかで、「現場で監督をしてゐるのはお父さんの友達で、むかし東京の大学で工科をやつた人だからそのつもりでよくお礼を申すのだよ」と留学生を北支開発のために力を入れているように描く。

そして、「アジアの子」と言われている兄弟達は、「北支に日本文化の移入を企てるために日本語学校の建設を父に建言しようといふのであつた」という。また、そのために、両国の文学研究者を学校の教師にさせようという。つまり、「アジアの子」の使命は日本文化を「北支」へ移入すること。ここで、「アジア」＝日本という構図は明かになつた。

また、汪の一家が北支の土地に踏んだ時の描写がある。

「あの曲は日本国歌ですね。」

質問は流麗な支那語である。

「さうです。あれが君が代、今度のが海軍マーチ。」

答へは美しい日本語である。

「なるほど。どうして今日はみな日本の国旗が出てゐるのですか。」

「日本の海軍記念日ではないのですか。」



「もう五月の二十七日ですかね。旅をしてゐて日を忘れてしまつてゐましたよ。」

北支で見知らぬ人と中国語や日本語を使って不自由なくコミュニケーションをしているシーンである。日本の国歌が外国で流れたり、日本の記念日が外国で祝われたりすることは、まさに佐藤が描こうとしている「王道楽土」に違いない。

実のところ、「アジアの子」で出される「北支開発案」などの発想は佐藤の随筆などでも見られる。例えば、「日支文化の融合―如何にして知識階級の融合を図るか」（『日本学芸新聞』一九三九年一月一日）という文章のなかで、佐藤は、

この周作人や銭稻孫などに、有力な私立学校の教授の椅子を与へて、いきのいい支那学を学ぶなども、日本の知識階級には得るところが決して少くあるまい。或ひは大陸の適当な土地をえらんで、日本と支那との男女学生を一緒に学ばせる、余り官僚風でない学校の計画なども面白いだらう。

と語っている。佐藤はかつて留日した「親日派」とみられる中国文人を日本に迎えたり、また中国へ留学生を送り出したたりすることの意義と主張している。佐藤にとっては、郭沫若もこの「親日派」に入るだらう。

また、佐藤は「文学者としての对支方策―文化開発の道」（『新

潮』一九三九年三月一日、第三六卷第三号）の中で、今の中国には文化がない、中国古来の文化は日本にだけ保たれている、中国の知識階級はむしろ日本に感謝すべきだと述べた上で、現在中国にいる日本人の質が低いため、「皇道を認識した行動性のある新日本の知識人が大陸へ進出する事が刻下の急務であらう」と述べている。また、経済開発は重要な工作だが、文化開発も「殆んど文化を持たない中華民国だけに、亦必ずしも無用ではあるまいと思はれる」とも述べた。しかも、佐藤は「彼国に乏しくない日本文学研究者を我国へ引き取る代わりに、我国にも絶無でない支那文学研究生を彼地に送るなどの事も、あつてよからうではないか」と具体案を出している。

佐藤は繰り返し「親日派」の役割を語っているが、中国の知識人はどう考えていたのだろうか。「抗戦文芸」の中に、「給周作人的一封信」（『周作人氏への公開状』（『抗戦文藝』一九三八年五月一四日、第一卷第四号）というのがある。周作人は一九三八年五月に、日本側が主催した「更生中国文化建設座談会」に出席し、発言した。このことは中国知識人に衝撃を与え、重慶の論壇を代表する茅盾ら一八名連署による「中華全国文芸界抗敵協会」が右の公開状を發した。公開状で、周作人の行動を「民族を裏切つて、仇敵に跪くことほかならない」と厳しく批判し、周に上海に来て抗敵救国活動に参

加するように勧めている。「でなければ先生は民族の罪人、文化界の反逆者になる」という。周作人はかつて留日した「親日派」知識人として知られているが、公開状に署名した知識人のうち、茅盾、郁達夫、馮乃超、胡風、胡秋原、夏衍、鄭伯奇、適夷ら八名もまた、過去日本に留学あるいは滞在したことがある知識人たちであった。

## 2、アジアの子Ⅱ泰少年の運命

「日本評論」一九三八年一月臨時増刊号に、倉田百三の戯曲「東洋平和の恋」が掲載された。同じ盧溝橋事件前後の留学生や「アジアの子」の物語である。中国軍人を父に、日本女性を母に持つて日本に亡命してきた少年泰は「日支親善」が嫌いだったが、アジア主義者である大学教授の北村と東洋平和のために身を捧げようとする少女雪子に感化されて、日支融合の文化的運動こそ自分の任務だと認識し始めた。ところが、支那事変が勃発し、泰少年と他の留学生たちが帰国するかしないかの選択に迫られた。そこで、泰は自殺した。北村は「僕は日本と支那とがひとつに融け合つたのを目の前に見た。君は日支融合の可能性なことを証して呉れた」と感嘆したという話である。

「東洋平和の恋」の中には、留学生たちが盧溝橋事件によって帰国するかどうかの決断を迫られるシーンがある。

留学生一。どうする？ これはいいよ初まるぞ。

留学生二。どうも戦争だな。

留学生三。どうしませう。困つたわ。

留学生四。僕は支那へ帰る気だ。

留学生一。学資もどうなるか解らないしな。

日本学生。まだ解らないよ。初まつたわけぢやない。

留学生二。君等は落ちついて居れるが、僕らはそう行かんよ。

留学生三。私も帰るわ。家の者が心配だから。

留学生四。僕は帰らない。帰つたつて初まらない。

また、「周」や「汪」と名乗つた留学生も登場して、「戦争になつた以上僕は僕の祖国を防護しなければなりません」と述べたり、「国に帰つて別の政府を起す運動をする」と語つたりしていた。

ここで、留学生たちはいろいろな立場に立つて、決して容易にアジア主義を受け入れようとしなない。一方、「アジアの子」である泰少年は「僕は日本と支那の融合を願ひ、それを使命としてゐる。これも確かだ。しかし支那人が日本人と戦つて、負けてるのを見ながら、僕は黙つて見て居れるだらうか」と苦しい気持ちを吐露している。また、結局彼が死を選んだことは作者が意図した「東洋平和のため」の貴い犠牲だという主張を表していようが、泰少年は安易にアジア／日本主義を受け入れることができないことをもまた物語つ

ている。

#### 四、おわりに

「アジアの子」は佐藤春夫と郁達夫の関係、佐藤の日本主義などの面から従来多くの批判を受けている作品である。本稿では、盧溝橋事件後の留学生一斉帰国の現象に光を当て、佐藤のフィクションの中からどのような意識が読み取れるのかを明らかにした。そこには、日本をよく知っている中国人（留学生）を「大東亜平和」のために役立たせようとする考えが隠されている。そのプロセスの中で、日本がアジア諸国（中国など）をリードすることが自明の前提になる。しかし、当時の留学生の一斉帰国の現象や日本側の反応を振り返ってみると、それは安直な考え方としか言えない。留学生は異なるコンテキストに置かれているので、文化交流の担い手と見られるが、異文化の受容の過程に伴う矛盾や葛藤についても見落されてはならないだろう。ただし、盧溝橋事件後、日本が中国で行なった侵略戦争や文化対策を見ると、佐藤が時局の動きを敏感に読み取ったか、あるいは当局と連携していたことも考えられる。というのは、一九三八年以降、日本の実施した対中文化対策はまさに「アジアの子」のように行われたからである。佐藤は「アジアの子」の冒頭に、「主題歌」を掲げ、「百鳥歌ふ天地に／人は人とし陸むべき／王道楽

土なからんや／今東海に日ぞ昇る」と「青写真」を描いたが、これは結局日本の国家主義や侵略戦争の本質を暴露することにほかならなかったのである。

#### 注

- ① 佐藤春夫『風雲』宝文館、一九四二年八月二十五日
- ② 先行論としては奥出健「佐藤春夫の昭和十年代（前期）——「アジアの子」の周辺・付著作目録補遺——」（『国文学研究資料館紀要』第六号、一九八〇年三月）、顧俸良「佐藤春夫と「アジアの子」（『日本文学』第四一巻第九号、一九九二年九月）、周海林「佐藤春夫と郁達夫」（『文学・社会へ地球へ』『西田勝退任・退職記念文集』編集委員会編、三一書房、一九九六年六月）、陳齡「佐藤春夫と郁達夫——イロニーとしての交遊史」（『愛知文教大学論叢』第四巻、二〇〇一年四月）、武継平「支那趣味」から「大東亜共栄」構想へ——佐藤春夫の中国観——」（『立命館言語文化研究』第一九巻第一号、二〇〇七年七月）などが挙げられる。
- ③ 一九二七年四月二日、中国国民党右派の蒋介石の指示により、上海で中国共産党を弾圧した事件。四・一二事件とも言う。
- ④ 義済民、方仁念『郭沫若年譜・上』天津人民出版社、一九八二年五月
- ⑤ 「日本を去る」のほか、武継平は「支那趣味」から「大東亜共栄」構想へ——佐藤春夫の中国観——前掲の中で、佐藤が「達夫の来訪」（郭沫若著、土居治訳、「中国文学月報」第二七号、一九三七年七月）を参考したと指摘している。
- ⑥ 当局に監視されたことは郭の文章に見られるが、山上の訳にはなかった。省略されたか、削られたかと考えられる。小野忍、丸山昇訳（『郭

沫若自伝五』平凡社、一九七一年一月）には見られる。ただし、タイトルは「日本から帰る」となっている。

⑦ 実藤恵秀『近代日中交渉史話』、春秋社、一九七三年七月

⑧ 実藤恵秀『中国人日本留学史稿』日華学会、一九三九年三月

⑨ 『中国人日本留学史稿』、前掲

⑩ 河路由佳「盧溝橋事件以後（一九三七～一九四五）の在日中国人留学生——さねとうけいしゅう『中国人日本留學生史』再考」（『一橋論叢』

第一二六卷第三号、二〇〇一年九月）

⑪ 東京左連の機関誌。一九三四年八月一日に創刊された。

⑫ 東京左連の二つ目の機関誌。一九三五年五月一〇日に創刊された。

⑬ 演劇に関することを旨とした雑誌。一九三五年一〇月一〇日に創刊された。（二号だけ）

⑭ 文芸同人誌。一九三六年八月一五日に創刊された。

⑮ 他十名とは、老舎、王平陵、張天翼、丁玲、舒群、奚如、邵冠華、孔羅荪、錫金、以羣らである。

⑯ 日本の戦争期における対中文化対策については、阿部洋『対支文化事業』の研究——戦前期日中教育文化交流の展開と挫折——（汲古書院、二〇〇四年一月）に詳しい。

〔附記〕 引用の際、ルビを簡略化し、日本語については、漢字は原則として新字体に改めた。／＼は改行を示す。